

痛風の変遷

The transition of gout

福井大学 理事・副学長
Takanori Ueda 上田 孝典

Key Words

痛風,
世界史,
ヒポクラテス,
日本史,
分子創薬,
トランスポーター

Summary

痛風は慢性に経過し、所見も豊富であり、紀元前より文献的記載も多く歴史を辿るに適した疾患である。

犬サフランによる治療より、ヒポクラテスを経て、症候学より生化学、分子遺伝学、分子薬理学などのときどきの医学の進歩をその変遷のなかで具現しつつ、本疾病の診断法・治療法が進歩してきたことは、きわめて示唆に富む。

そのなかで、明治まで患者がいないとされたわが国で、本疾患は戦後爆発的に増加し、今や100万人を超えると推測される重要な生活習慣病に位置づけられる。それに呼応するかのごとく、本邦より新規尿酸降下薬の分子創薬による開発、新規トランスポーターの発見など、世界をリードする研究成果が生まれつつあることは、興味深くまた喜ばしい。

はじめに

生物界における痛風の歴史は、500万年といわれる人類の歴史をはるかにしのぐものであり、たとえば1997年にNature誌で報告された恐竜ティラノザウルスの骨の化石における痛風結節の病変の報告¹⁾はよく知られており、約6～7千万年前の出来事と推測される。

1 痛風変遷の世界史

人類に限って痛風の歴史を振り返ると、まず紀元前約1500年にコルチカム(犬サフラン)がエジプトで関節炎に使用された記載があり、紀元前5世紀にはヒポクラテス(ギリシア)も、コルチカムやそれに含まれるアルカロイドであるコルヒチンによる治療につき記載している。加えてヒポクラテスは、痛風にならない者として去勢された男性、閉経前の女性、性交開始以前の青年を挙げており、さらに痛風による関節炎は40日以内に軽快し、発作は春と秋によく起こり、関節の腫脹と疼痛には冷水が効果的であるなど、今も疫学、症候学的に通用する記載がなされているのは驚くばかりで